The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	葉徳輝の「双梅景闇叢書」をめぐって
Author(s)	深澤, 一幸
Citation	言語文化研究. 2012, 38, p. 67-91
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24697
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

葉徳輝の「双梅景闇叢書」をめぐって

葉德輝“雙梅景闇叢書”之周邊

深　澤　一　幸

提要：本論文要探討的是清朝末年的考證學者兼藏書家葉德輝之很有刺激性的出版,就是“雙梅景闇叢書”的公開刊行,對當時知識文化界帶來的衝擊和影響。尤其是這個叢書所收的房中書跟日本傳來的“醫心方”之關係是這個論文論述的重點。

キーワード：葉德輝，房中書，医心方

1

湖南の葉徳輝（1864－1927）といえば，中国の清朝末期から民国初期，日本では江戸の元治元年から昭和２年，にかけての考証学者かつ蔵書家だが，とりわけ交流をもった日本人学者が多いことでも有名である。たとえば，竹添井井，内藤湖南，島田翰，滝川亀太郎，長尾雨山，永井禾原など。ここは，ジャーナリストの徳富蘇峰が明治39年（1906）７月16日にかれを訪れた記述を，「七十八日遊記」（民友社，明治39年11月）「洞庭湖と湘江」の「葉徳輝氏の蔵書」から引こう。

> 予は長沙に於て，十六日の午前，湖南汽船会社の木幡氏等と与に，葉徳輝氏を訪問して，其の所蔵の図書を，一覧したる事を，記せさるを得す候。葉氏は，湖南郷紳の一人にて，尤も好古の学者に候。所見纔かに其の一斑に過きされとも，膠泥活字板の韋蘇州詩集の如きは，清国に之を有する者只た三人而已と承り及ひ候。其他南宋槧の玉台新詠の如き，北宋金刊＝金刊とは金朝の刊也＝の埤雅の如き，又た宋槧の右軍小楷老子道徳経の如き，流石に流涎を禁する能はさる珍物と存し候。其他書画の類，雲煙過眼悉く記する能はす候。予は北京恭親王府に於て，宋槧の論語を瞥見したる以来の愉快を覚へ申候。

蘇峰は葉の蔵書にすっかり感心しているようだが，あまり良くない印象をもったものもいた。つぎは漢学者の諸橋轍次が大正９年（1920）５月に葉を訪れた記述を，「遊支雑筆」（目黒書店，昭和13年）五「旅枕」の「湖南学者」から引こう。

五月十二日，葉徳輝氏を訪ふ。年六十に満たず，鬚髯無く，出歯にてあばたあり，金縁眼鏡を掛けたり掛けなかつたり，一見せる所甚だ品なき男なり。筆談す。学問はなか〳〵博通の様なり。談五行の説に至る。曰く，五行は焦氏の易林に始まる。此の説知るもの少しと，大気焔なり。

五月十四日，又葉氏を訪ひ蔵書を見る。彼の有する所，宋版は多く之を蘇州に運びたりと云ふ。元版以下は甚だ多し。章太炎，康有為に紹介状を頂戴して帰る。

以上は印象に過ぎないので，全貌を知るために，橋川時雄纂「中国文化界人物総鑑」（中華法令編印館，昭和15年10月）の「葉徳輝」の項を引く。

字は漁水，号は郋園（かれは「説文解字」の著者たる許慎を慕い，その故里郎をとって号とした），又（字）は煥彬，湖南長沙の人。其の祖は葉夢得，独学精苦して光緒年乙未（酉）科（1885）の挙人，十八年壬辰科（1892）の進士，光緒二十二年（1896）の頃北京に赴いて一年ばかり滞在，時に革命思想澎湃として全国にみなぎり，各新聞が革命宣伝につとむるや彼れはこれに反対して「翼教叢編」（編者は蘇輿）を著はし，頗るそれらの説に痛撃を加へた。光緒三十年（1904）の頃張之洞の存古書院に聘せられたるも赴かず，辛亥革命の際湘潭朱亭に避難し，其の時の感慨は詩作「朱亭集」に輯めらる。民国四五年の頃湯薌銘が湖南督軍となるや，其の政治を非難せる一文がはしなく北京の某報に披露されて，湯の激怒を買つて遂に捕はる。幸に袁世凱が其の学才を惜んで，寛仮すべき旨を示電したので厄を免かれ得た。民国十年（1921），十四年（1925）に北京来遊，民国十六年（1927）四月十三日長沙にて共産党軍のために斃る（毛沢東らが指導する湖南農民運動の高まりのなかで，悪徳地主として処刑された）。

彼れは小学目録版本の学に精しく，また星命の学にも及ぶ。其の経学にあつても漢唐注疏に通じ，湖南素証学の先河をなすものと見られてゐる。頗ぶる蔵書に富み，また著述も多く，書室を観古堂と名づけた。・・・

また「双梅景闇叢書」十三種二十一巻には「素女経」一巻，「素女方」一巻，「玉房秘訣」一巻（附「玉房指要」一巻），「洞玄子」一巻，（唐・白行簡撰）「天地陰陽交歓大楽賦」一巻，（元・雪蓑漁隠（夏庭芝）記）「青楼集」一巻，（清・余懐撰）「板橋雑記」三巻，（清・西渓山人撰）「呉門画舫録」一巻，（清・安楽山樵（呉長元）撰）「燕蘭小譜」五巻（附清・趙執信撰「海漚小譜」一巻），（清・金徳英等撰）「檜門観劇絶句」三巻（附「和作」二巻），（明・賈鳧西撰）「木皮散人鼓詞」一巻（附清・帰荘撰「万古愁曲」），（清・舒位撰）「乾嘉詩壇点将録」一巻，（「重刻足本乾嘉詩壇点将録」一巻），（清・王昶輯）「秦雲擷英小譜」一巻，を収む。・・・

橋川氏の紹介からもわかるように，葉徳輝は書誌学者として「書林清話」十巻など優れた著

作があるものの，基本的には中国の革命に反対した保守反動の学者として，かれの生きていた当時も，もちろん現在においても，その評価はあまり芳しくない。とくに橋川氏も詳述した二本の梅の暗い影と題する「双梅景闇叢書」は，その光緒三十三年（1907）の最初の七種出版以来，きわめて大きな非難を世人から浴びることとなった。たとえば，民国の倫明の「辛亥以来蔵書紀事詩」の「葉徳輝」の条で，雷夢水は「惟だ刊する所の「双梅景闇叢書」は，大いに世人の詬病する所と為る」という按語を付している。

また，清末の李肖聃は「星廬筆記」（民国33年刊）で，葉が「「黄帝素女経」「天地陰陽交歓大楽賦」を刻して，「双某景庵叢書」等を為し，春宮の秘戯に於いて，人を導くに淫を以ってし，軽薄少年は争いて之を購う。其の子（葉）尚農は復印し以って世に行うや，許季純は之を責めて「汝の父が刻する所の書，竟に他種の印す可き無き也」と云う」と述べ，民国の姚霊犀は「思無邪小記」（民国30年刊）で「惟だ葉氏は敦煌石室遺書に偽托して「素女経」一書を作り，素女が黄帝に対し挙ぐ所の五女の法を敷疏し，津津として楽しく道い，稍やも忌避せず」と述べる。

いま引いた非難からも推測されるように，この「叢書」に収録する著作の大部分は儒教道徳が忌避する男女の交わりに関係し，宣統三年（1911）の再版，十七種三十六巻，のときに追加した，西北辺境の敦煌から写本で発見されたポルノグラフィー「天地陰陽交歓大楽賦」はいうまでもなく，初版から収める「素女経」「玉房秘訣」「玉房指要」「洞玄子」の四種四巻，再版で追加した「素女方」一種一巻は，じつは男女のセックスの技法を説く房中術の書であり，葉がおのれの蔵書を分類した「観古堂蔵書目」（民国５年，1916刊行）巻三，子部方技類房中之属にも，「徳輝校定，光緒癸卯（二十九年，1903）観古堂刻本」の注とともに記載されているのである。

では，保守反動とされるほど儒教の伝統を守るはずのかれが，儒教の性道徳にまったくそぐわないこの初版四種の房中書を，名望をけがすことも厭わず刊行した経緯は，いったいいかなるものであったのか。ここで「癸卯（1903），日は長至（五月二十八日，６月23日），長沙の葉徳輝序す」と記した「新刊素女経の序」をあげよう。

「隋書・経籍志・子部・医家類」には「素女秘道経」一巻有り，注して「並びに玄女経」と云う。又た「素女方」一巻有り，新・旧の「唐（書経籍・芸文）志」は均しく著録せず。惟だ日本の寛平中（889－897）の「見在書目」（日本国見在書目録）には「素女経」一巻あるも，而るも「玄女経」「素女方」は無し。疑うらくは其の時は合して一書と為し，復た分列せざる也。寛平は中国の唐の昭宗の時に当たる。其の時は彼の国の書を齎すの使いは，道途に絡繹たり，故に五代の乱後に書亡ぶも，彼の国には皆な伝わる者有り。此の経は未まだ刊本有るを見ずと雖も，載せて彼の国の永観二年（984）丹波康頼の撰する所たる「医心方」廿八巻中に在り，首尾貫通，是れ完帙たるに似たり。永観二年は宋の太宗の雍熙元年為り，唐を去ること未まだ遠からず，其の中に採りし所の「玉房秘訣」「玉房指要」「洞玄子」，并びに此の経は，

皆な房中の事を言う。又た（巻二十八に）載する「養陰」「養陽」の諸篇は，大抵漢・隋の（芸文・経籍）両「志」中の故書旧文，十に八九を得たり。

今遠西の衛生学を言う者は，皆な飲食男女の故に於いて，隠微を推究し，新書を訳出す，如えば「（男女）生殖器（学）」（著訳者不明，光緒年間，曦記館石印）「男女交合（秘要）新論」（アメリカの法烏羅撰，憂亜子訳，光緒二十七年（1901）香港書局石印）「（男女）婚姻衛生学」（日本女医の松平安子撰，誘民子訳，光緒年間，啓智書会刊）。無知の夫は，詫ろきて鴻宝と為す。殊に知らず，中国の聖帝神君の胄は，此の学は已に四千年以前に於いて講求せるを。即ち緯書に載する所の「孔子閉房記」一書（北魏の孝文帝の太和九年（485）に，他の緯書とともに禁書として焚かれる。「旧唐書・王世充伝」に断片あり），世には伝わらずと雖も，其の学の古きは知る可し。又た如えば「春秋繁露」「大戴礼」に言う所の古人胎教の法は，性情に端まり，似（嗣？）続を広げ，以って位育（「中庸」に「中和を致さば，天地は位す，万物は育つ」とある）の効能を尽くすに非ざるは無し。性学の精は，豈に後世の理学迂儒の能く其の要眇を窺う所ならんや。然らば則ち「素女」の一経は，猶お是れ斯道の大輅椎輪（原始的な大車と車輪で，物事の始まりをいう）なる耳。

「経」中に玄女・采女の問答を雑出せしより，「素女」「玄女」は本もと一経に合せしにて，「隋志」の巻を并せるの説と合う，を知る。其の文の首は多く冠するに「玉房秘訣」「玉房指要」「太清経」「産経」を以ってし，必らず是れ諸書従り引き出だせしなり。蓋し其の書は房術の鼻祖為りて，各家が援引し，人人は得て之を見，故に亦た必らずしも別行して世に伝わらざる也。「素女方」全巻は唐の王燾の「外台秘要」十七巻に載せ，題は「素女経四季方」と称す。孫氏星衍は録出し，刻して「平津館叢書」に入る。読者は隋唐の旧籍に因り，以って古聖人の樂を制し情を禁ずるの節文（礼節），年を延ばし子を種うるの要道を求め，華胥の族類を俾て，神州に繁衍せしめ，和平寿考の休徴（めでたい兆候）をして，宙合に充溢せしめよ。世に達人有り，熟誦して潜学せば，其の陰陽始終の義に於いては思い半ばに過ぎん。

つづいては，「素女経序」の翌日に書き，「癸卯，日は長至の後一日（五月二十九日），葉徳輝序す」と記した「新刊玉房秘訣の序」をあげよう。

日本の丹波康頼の撰する所たる「医心方」書中には「玉房秘訣」「玉房指要」を引き，房中陰陽の術を詳言す。称する所の黄帝・彭祖の説も，亦た他書に見えず。蓋し其の事は甚はだ秘にして，方技家の知るを得る所に非ず。即い之を知るも，亦た人に語るに足らざる也。嘗つて考うるに，「隋書・経籍・子部・医家類」には載せて「玉房秘訣」十巻有り，又た八巻を重出し，均しく撰人を題さず。「（旧）唐書経籍志」は「房秘録訣」八巻に作り，沖和子撰と云う。「新唐書・芸文志」は「沖和子玉房秘訣」十巻に作り，張鼎撰と云う。此の書は毎に「沖和子曰わく」と称すれば，則ち張鼎の書たること疑い無し。但し謂う所の「指要」

なる者は，僅かに寥寥たる数条のみ。或いは即ち一書の異名か，或いは書中の要指を撮り，別に巻帙を為せしか，倶に未まだ知る可からず。唯だ是れ房中の術は，五帝三王の遺聞に本づき，「漢書・芸文志・方技略」に房中書を録するに「容成陰道」以下八家（「容成陰道」「務成子陰道」「堯舜陰道」「湯盤庚陰道」「天老雑子陰道」「天一陰道」「黄帝三王養陽方」「三家内房有子方」）有り。東京（後漢）の板蕩し，典午（晋朝）の胡灰せし自り，官史志書には，未まだ著録を見ず。丹波の称述する所は，什（十）一を千伯（百）の中に存するに過ぎず。而るに其の書は存せしが若く亡びしが若く，中土に伝わらず，道蔵に入らず。若し更に数百年たたば，陰陽は和を失い，民物は夭札（折）し，天地（陰陽男女）は閉塞（交通せず）し，黄胄は淪胥し，東方発舒の地は，寂滅の境と成為るに幾からず耶。

今幸いにも同州の国（中国と同じく九州に属する日本）は，文教相い通じ，秘本は流伝し，吾が故土に還る。今伝述するに及びて，人人を俾て飲食男女の節の，以って中和位育の功を致す可きを知らしめ，且つ以って聖聖相い伝うるの仁心にして，人を損ない己れを益するの詭道に非ざるを知らしむ。篇中に言う所の形勢は，皆な百脈を調和し，性情を平治する所以なり。後に方書（男女の性病治療などに用いる薬剤を記した本草書）を附すも，金石剋伐の剤無し。美しき哉善き哉。誠に養生の秘旨，保命の奇方。後に述ぶる者有るも，及ぶ可き勿き已。余は弱冠自り，篤く方書を好み，参同家（「周易参同契」の煉丹修養を信奉する派）の言に習う。偶を失いて鰥居し，自から坎兌（いずれも「易」の卦で，水と澤を表すが，ここは男女交合の事をいうか）を調う。其の間，人世の奇変を閲し，男女を託するに浮游を以ってす。朋侶の悪疾身に攖り，嗣続の貴きに艱しみ，甚だしきは或いは朝に東門の客（権貴をきわめた者）と為り，夕は北邙の山（死後埋葬される場所）に登り，木槿のごとく栄枯し，蜉蝣のごとく視息するを見る毎に，試みに与に此の書の究竟を窮め，夫婦の能知を言うも，奉じて至言と為し，以って相い節制するもの有る莫し。身死し嗣絶ゆるに至るに及びては，悔悟するに由無し。豈に哀しむ可からざる，豈に痛む可からざる。嗚呼，余の此の書を刊するは，将に以って一世の沈迷を振い，斯の民を衽席に登らしめんとせしにて，以って秘道を侈陳し，異聞を矜示するに非ず。後の覧る者は，以って諒らかにす可し。

つづいては「玉房秘訣序」の翌日に書き，「癸卯，日は長至の後二日（閏五月朔），長沙の王徳輝序す」と記した「新刊洞玄子の序」をあげよう。

「洞玄子」は陰陽の秘道を言う。其の書は隋唐の史志には見えず，日本の丹波康頼の「医心方」廿八巻に引見せらる。要らず是れ北宋以前の古書ならん。其の文辞は爾雅にして，多く六朝人の綺語に似，「雑事秘辛」（漢の無名氏撰とされるが，じつは明・楊慎の偽作といわれる。漢の桓帝の梁皇后が冊立される前，女官の呉婀に全身の，とくに性器の検査を受けた描写がある）「控鶴監記」（唐・張垍の纂とされるが，じつは清・袁枚の偽作といわれる。唐

の則天武后の宮中淫事を描く）諸偽書の同日に論ずる可き所に非ざる也。

夫(そ)れ房中の術は，載せて「漢書・芸文志・方技略」に在り。「志」の言に曰わく，「房中なる者は，性情の極，至道の際なり。是(こ)こを以って聖人は外楽を制し以って内情を禁じ，而して之が節文を為す。楽しみて節有らば，則ち和平寿考なり。迷者は顧み弗(ざ)るに(及びて)，以って疾を生じて性命を隕(おと)す」と。信(まこと)なる哉是の言。「極」と曰い，「際」と曰い，「制」と曰い，「禁」と曰う，欲を縦いままにし以って度を敗るに非ず，乃ち性を養い以って齢(よわい)いを延ばす也。洞玄子なる者は，其れ亦た容成・務成（いずれも馬王堆の古医書「十問」にも登場する最初期の房中養生家）の流亜与(か)。書中に臚列せる三十法は，後世秘戯の濫觴為り。其の血脈を和し，疚疾を去るを要とせば，其の言は「素女経」「玉房秘訣」の間に出づ。故に医家は之を重んじ，並びに相い援引す。惜しむらくは世に伝わること久遠なるに，之を刊行する者有る無し。余は既に「素女経」「玉房秘訣」の諸書を録し，手校して刊に付せば，並びに此の書に及び，以って古学を存す。

近日，妄人は新理を談ずるを喜び，以為(おもえ)らく，「男女は裸逐（夏の桀王は諸后妃・宮女たちと酒池肉林の間を一糸まとわず追いかけっこして戯れた）し，而る後に大同に進む」と。豈に知らんや，人の禽獣に異なる所以の者は，裸（人類は裸虫に属する）にして逐わざるに在り。則ち衣冠つけ揖譲し，婚姻は孔(はな)はだ嘉なり。上は以って造化生物の仁を広げ，下は以って子孫「螽斯」（「詩経」周南の一篇で，いなごの繁殖迅速をもって，后妃の子孫多数にたとえる）の慶を獲たり。果たして妄人の尚ぶ所の如くんば，則ち是れ未まだ綺戒（「四十二章経」があげる悪い「十事」の一たる「綺語」男女の私情・セックスにからむ言葉，への戒め）を犯さざるに，先に泥犂(でいり)（サンスクリットの「地獄」の音訳）に堕ち，豕交を為さずとも，亦た獣畜なり。彼れも亦た人情耳(のみ)，胡(な)んぞ化を閨門に起こし，本身以って則を作さざるや。而るに乃ち空言もて世を惑わし，天下の人を率い，牛首蛇身の俗に還らしめんと欲すとは，亦た何んの心ぞ哉(や)。是の書伝わらば，則ち人道も亦た之に因りて伝わり，而して一切の異俗野言は，耳目を淆乱せしむるには至らず。余は諸侯壁上従(よ)り観る（「史記・項羽本紀」の「楚が秦を撃つに及びて，諸将は皆な壁上従り観る」にもとづき，事外に身を置き，成敗を傍観するをいう）と雖も，或いは溺人の笑う所と為る（「春秋左氏伝」哀公二十年に呉王の言葉として「溺人は必ず笑う」溺れ死にそうな人は無理に笑おうとする，とある）には至らざる也(か)夫。

以上の三序からわかるように，葉徳輝が「叢書」に収録した房中書五種は，「素女方」が唐の王燾の「外台秘要」巻十七から抜き出されたのを除き，ほかの四種は日本の平安時代の医学者たる丹波康頼が，隋唐以前の医書を収集し整理し永観二年（984）に完成した「医心方」三十巻，とくに巻二十八「房内」から抜き出して，まとめたものである。

かれは，これらの書がおそらく漢代からの房中の伝統を受け継いで，隋唐以前の六朝時代に

出来たものだろうと考証したうえで，おのれがこれらの書を刊行した理由について，次のように述べる。「遠西」西欧の「衛生学」性医学に驚き，「鴻宝」として後生大事にしている「無知」の「妄人」どもは，訳のわからぬ「新理」を「談」じたがり，「空言もて世を惑わ」し，それゆえ世間の男女関係は乱れている。しかしながら，連中は知らぬのだ，わが国はすでに四千年も前から「聖帝神君」の「胄」子孫たちが，孔子の儒教の教えにのっとって「性学」を講究し，「中庸」の「中和を致さば，天地は位し，万物は育つ」といった効能をもたらすセックスの技法を研究してきたことを。今わたしがこれらの書を刊行するのは，そこに記載されている我が国古来の健全なセックスを世に広めることにより，わが漢民族が中国で繁栄増加し，平穏で長寿の兆候が宇宙に充満することを願ってなのだ。そしてこの刊行は，私が傍観者だからといって，おそらく「溺人」つまり「妄人」どもに笑われるいわれはあるまい。

2

葉の説明がどれほど説得力を持つかはさておき，かれがみずからの儒教的信念によって刊行した，房中書を含むこの「双梅景闇叢書」は，当時や後世の知識人たちにさまざまな影響をもたらした。いまは葉の保守反動と正反対に位置する思想家・小説家の魯迅と，その弟で思想家・日本学者の周作人の例を紹介したい。

魯迅は1925年4月8日付けの劉策奇に宛てた手紙で「叢書」に言及していう，

> あなたが「砭群」で見た「擊筑遺音」とは，「万古愁曲」で，葉徳輝に刻本があり，「崑山の帰荘玄恭」の著と題し，「双梅景闇叢書」中にありますが，しかし刪節があまりにも多く，たとえば孔老二（孔子）を叱責した一段は，まったくありません。

また，魯迅はのち1927年９月16日の「北新」週刊第47・48期合刊に発表した「書苑折枝（二）」でも，「万古愁曲」に言及していう，

> 案ずるに，近ごろ長沙の葉氏は「木皮道人鼓詞」を刻し，昆山の趙氏（趙貽琛）は「万古愁曲」を刻し，上海の書賈は又た拠りて石印を以って小本を作り，遂に頗る流行す。二書の作者は明末に生まれ，世事の為す可き無きを見，乃ち強(し)いて己れが身を世外に置き，旁観放達の語を作(な)し，其の心曲は此の宋末の作と正に同じい。

「木皮道人鼓詞」はもちろん「双梅景闇叢書」に収められているが，「万古愁曲」はこの「鼓詞」に附録として付いている。

ところで，北京にいた魯迅は重編の「叢書」を購入したらしいことが，かれの日記からわか

る。重編本が再版に「東林点将録」（明・王紹徽撰）を加えて刊行された民国3年（1914）の10月10日の日記を引こう。

十日　曇り。国慶日にて休息。下午は晴れ。留黎廠（リウリーチャン）の宝華堂に至り,「麗楼叢書」一部七冊,「双梅景闇叢書」一部四冊,「唐人小説六種」一部二冊,「三教源流搜神大全」一部二冊を買い,共に銀七元。夜,「会稽典録」輯本を審（しら）ぶ。

「麗楼叢書」は「麗廔叢書」九種十八巻のことで，再版本「双梅景闇叢書」十七種三十六巻とともに，葉徳輝の輯刻本である。

それからほぼ一年後，民国4年（1915）10月７日の日記にはいう，

七日　晴れ。上午，二弟（周作人）に書二包を寄す,「長安獲古編」二冊,「鄭廠所臧泥封」一冊,「万邑西南山石刻記」一冊,「阮庵筆記」二冊,「香東漫筆」一冊,「随軒金石文字」四冊,「双梅景闇叢書」四冊附「楊守進自訂年譜」一冊,「教育公報」三冊，丸善の「学鐙」一冊。

魯迅は一年ほど手元に置いていた「双梅景闇叢書」四冊を，すべてに目を通したのか，この日そのまま，当時南の浙江省紹興の実家にいた弟の周作人に郵送してやったのである。

これに応じて，五日後の民国４年（1915）10月12日の「周作人日記」にはいう，

晴れ。上午，大街由（よ）り帰り,「小説月報九」一冊を収む。下午，閲了す。北京八日の函，又た七日に寄せし書二包，内は「長安獲古編」「双梅影闇叢書」等八部十六本，を得たり。謐（ひつ）（周作人の長女静子）は又た病胃を患い，嘔吐す。往きて高先生に問う。柯橋に往くも値（あ）わず。飲ますに薄荷蘇打（ソーダ）片を以ってす。晩,「獲古編」「香東漫筆」を閲し了（おわ）る。小舅父去る。

これ以後，周作人が折りにふれて「叢書」を，とくに房中書を熟読したろうことは，その痕跡が残っている。ほぼ十年後の民国13年（1924）８月10日，すでに北京大学の教授となっていた周作人の日記には，いう，

晴れ。下午,（兪）平伯来訪す。（銭）玄同来り, 代りて「双梅影庵」一部六元を買い来る。晩，十時後に去る。

おそらく新版の「双梅景闇叢書」が刊行されたので，とくに友人の北京師範大学教授銭玄同にたのんで買って来てもらったのだろう。

また, 民国31年（1942）の「古今」に発表した「旧書回想記」（「蠹魚篇」1943年12月に収む）

の「消寒新詠」の条でもこういう，

近日，「消寒新詠」四冊，乾隆乙卯刊，三益山房外編と題す，を手にいれた。時代からいえば，「燕蘭小譜」に十年後れるだけで，また絶好の資料である。・・・本来，観劇の詩は古くから有り，金檜門の三十絶句は最も有名で，王（先謙）・朱（益濬）・皮（錫瑞）・易（順鼎）・葉（徳輝）諸家の和作はすべて二百余り有り，「双梅影闇叢書」に見える。

金檜門（徳英）の「檜門観劇絶句」とその「和作」が「叢書」に収められているのはもちろん，「燕蘭小譜」も「叢書」に収められている。

さて，周作人はもともと性心理学に大きな関心を持ち，性学者ハブロック・エリスの大著「性心理学」を熱心に中国に紹介したりしていたので，「叢書」中の，とくに房中書はしっかり読んだにちがいない。そのことを示すのは，葉徳輝が湖南農民に処刑された直後，かれが1927年４月刊の「語糸」126期に発表したエッセー「香りの庭」（「談龍集」開明書店，1927年12月）である。題名の「香りの庭」とは，16世紀のチュニスでシャイク・ナフザーウィ上人によってペルシャ語で「愛の術」を説かれた淫書「心を楽しませる香りの庭」全二十一章であり，エリスも常に引き合いに出す書物である。かの「千夜一夜物語」を英訳したイギリスの探検家・人類学者・外交官たるリチャード・フランシス・バートン（1821－1890）は，この「香りの庭」をも翻訳したが，バートンの死後，かれの妻は不道徳ゆえに夫の名誉を傷つけるとして，ローマ詩人カトゥルスの未完訳本，日記・ノートなどいっさいの原稿ともども，この翻訳を焼き捨ててしまった。

この事件を知っての感想を，周作人は以下のごとく述べる。

私はここで「素女経」などの書を刻した故葉徳輝先生を連想せざるをえない。これらの書は，もちろん道士が造りだしたものであり，中にはたくさんでたらめな話があるけれども，しかし好い部分が無いわけではなく，結局は性学の好資料としてよい。葉氏が思い切って大胆に公表したことも，敬服するに足るものである。――奇妙なことには，かれは本来「教えを翼ける」儒者であり，当然中産階級の道徳を守るはずだ。これはとても大きな矛盾である。しかしこの謎もあるいは簡単に解決するかもしれない。葉氏のこれらの書にたいする興味は，たぶん他人の気血を吸い取り自身を補益する方面にだけあり，性の現象や愛の芸術を率直に語ることには決してないのだ，現代の常識的な人びとの見方のごとく。北京・天津の新聞記事によれば，葉氏はすでに湖南で銃殺されたとのこと。これがどういう理由でなのか，我われはわからない。とにかくあれらの書を刻したためではないだろうことを私は願う。

周作人は「叢書」の房中書を道教を信奉する「道士」が造ったでたらめなものと規定する一

方で，「性学の好資料」として評価している。この点は注目すべきである。

なお，ここでは葉がなぜ銃殺されたのか，「わからない」と述べていた周作人は，のち1950年６月22日刊の「亦報」に発表したエッセー「葉徳輝案」（「飯後随筆」に収む）で，五四運動ごろの北京大學の同僚，湖南人，かつて湖南の党部で仕事し，葉の案件をみずから処理したという人物に，上海で出会い，事件の経過を聞いたとして，その理由を述べる。

> 聞くところでは，この事の根源はやはり民国四年（1915）にあった。袁世凱が皇帝になる準備をし，各地の官紳が群起して即位を求めたとき，葉徳輝は突然奇想を発し，民間から五十名の十五六歳の少女を徴発したが，訓練して洪憲宮中（袁世凱の宮廷）に女官として送り込むためということだった。かれは現地ではとても勢力があり，民衆がどうして反対できようか。そのうちに帝政は取り消しを迫られ，女官はもう使い道がなくなってしまった。しかし葉徳輝は自分で「先にすべて使い終わった」，その後で彼女らを解放して家に帰らせた。それから十年たって，人民革命が湖北・湖南で始まった。あの女性たちのあるものはもう幹部になっており，農民協会にこの事を訴えた。そのとき農民協会は武力を持っていたので，かれを捕まえ，党部が主導して公開審理した。あの原告たちは逐一陳述し，時間も場所も確実な証拠があり，かれも否認できなかった。この話をしてくれた人はいった，「我われも今のように坐っていて，何の形式もとりませんでした。我われはかれに尋ねました，「葉先生，あなたはどう思いますか」。かれは答えて言いました，「それなら一罰百戒でいいよ」」。この事はこのようにして解決したのである。

周作人はこの五十歳あまりの旧同僚の話を信じたようである。

3

さて，葉徳輝が「双梅景闇叢書」を刊行した経緯，とくに房中書四種四巻は日本で書かれた「医心方」から輯逸したことが，ほぼ明らかになったが，では日本でもそれほど流布していない稀少な「医心方」をかれはいかにして手に入れたのだろうか。生まれた同治三年（1864）一歳より「素女経」などを新刊する光緒二十九年（1903）四十歳までの間，かれは大体は内陸たる湖南の長沙で過ごし，光緒十二年，北京，十五年，北京，十八年，北京，上海，武昌，二十二年，上海，南京，北京，二十三年，北京，蘇州，に出向いたぐらいである。もちろん国外に出たことは，一度もない。「新刊玉房秘訣の序」で「今幸いにも同州の国は，文教相い通じ，秘本は流伝して，吾が故土に還る」というごとく，日本から還ってきた「医心方」を国内で見たことは，間違いない。そこで，ここからは，「医心方」が中国にもたらされた状況を考えることにする。

まずはじめに登場するのは，学者兼ブローカーとして，清朝当時の二束三文でしかない碑帖・

銭幣・印章を交易の元手として，中国では失われ日本にのみ伝わる比べようのない貴重な古写本と交換し，中国に持ち去って「古逸叢書」刊行に貢献した楊守敬（1839－1915）である。かれは清の光緒六年（1880）に駐日公使黎庶昌の随員として来日すると，離日する十年（1884）まで，日本に残る古籍の調査に没頭したが，そこで「医心方」の抄本および安政版刊本をみて驚嘆し，その内容を初めて中国に紹介したのである。かれが日本で手に入れた書籍のリストたる「日本訪書志」十六巻（光緒二十三年，1897，刊行）の巻十，「医心方」三十巻（古巻子本を摸刊す）の解題をあげよう。

日本の永観二年，丹波宿称（弥）康頼が撰進す，中土の宋の雍熙元年に当たる也。其の原書は巻子本と為し，安政元年（1854），官府は医学（館）に命じ摸刊以って行わしむ。其の書の体例は王燾の「外台秘要」に仿（なら）う。引く所の方書は，但だ「隋志」にのみ見える者有り。隋・唐・宋の「志」に見えず，但だ其の国の「見在書目」にのみ見える者有り。亦た独り此の書の引く所にのみ見え，箸（著）録家に見えざる者有り。即（たと）い常見の書為（た）るも，而るも見る所の本の大いに異なる者有り。如えば廿七巻中に稽（嵇）康の「養生論」を引くに，多く今本の外に溢出すれば，則ち「文選」（巻五十三）の載する所は，昭明（太子）に刪削せ為（ら）れしを知る。康頼の選録せるは，当に是れ「叔夜集」（嵇中散集巻三）中の原本なるべし。其の標記旁注に至りては，是れ後人の此の書を校せし者の為す所にして，而して其の見る所も亦た古逸書多し。如えば陸法言の「切韻」を引くは，孫愐の「唐韻」と相い混合せず。郭知玄・麻果（杲）・釈宏（弘）演の「切韻」，武玄の「韻詮」を引くも，亦た唯だ「見在書目」（十　小学家）にのみ見えて，唐・宋の「志」には聞く無し。陸善経の「字林」に至りては，更に攷無く，良（まこ）とに彼の国の古籍を富蔵するに由る。「見在書目」の載する所に拠れば，幾（ほと）んど隋・唐の「志」と相い勒す。康頼は鍼博士為り，又た近く其の秘府の蔵する所を見るを得，故に能く博贍なること乃ち爾（しか）り。

丹波元堅等（侍医の多紀元堅・多紀元昕）は此の書を校刊し，其の「外台秘要」と校べて「之に過ぐる有るも及ばざる無し」（「医心方」を刻するの序，安政元年十二月）と称するは，良とに溢美に非ず。其の書体の秀逸にして，古香挹（く）む可きも，亦た誠に元堅等の説く所の如し。今原書の第二十二巻は尚お稲垣真郎家に存す。余は曾つて借り得て刊本と比校するに，篇幅字体は稍や縮むも，而るも鑑（かがみ）の影を取るが如く，毫髪も爽（たが）わず。其の影写手の渡邉岸允も亦た一時の絶技にして，刊刻の精，校訂の密は，当に日本の摸刻古書の第一と為すべし。其の載する所の校刊職名の中，森立之（たつゆき）・浅田惟常（これつね）（宗伯，1880－1888）の如きは，今巍然として猶お存し，皆な群書を博覧して，中土方今の医家の未まだ有らざる所也。

楊守敬が「医心方」を発見するうえで，きわめて重要な役割を果たしたのは，解題の安政刊本の「校刊職名」でも名をあげる森立之（1807－1885），字は立夫，号は養竹，である。かれ

は江戸人で，渋江抽斎と交わり，井沢蘭軒に直接師事し，医者として考証学者として，中国最古の本草書「神農本草経」の復原刊行と，江戸末期の日本に存在する元刻以前の古籍の書誌「経籍訪古志」八巻を渋江抽斎らと共編，とくに巻七・八「医部」の刊行に尽力した。安政元年，かれの「神農本草経攷注」が刊行されると，幕府の医学館の講師に任ぜられ，同年末には，医学館の「医心方」校刊事業にも助校を命ぜられた。安政五年には，将軍家茂に謁見が許され，御目見医師に列せられた。安政七年には，助校として参画した安政版「医心方」が完成した。明治維新後は，職を転々としたが，明治12年（1879）には同志と諮って温知社を組織し，月刊誌「温知医談」を刊行したり，医経の講義を開いたりした。なお，安政版「医心方」の版木は，明治維新後は医学館とともに新政府が管理し，大学東校をへて東京帝国大学に帰した。

楊守敬はこの森立之と親交をむすび，その編書「経籍訪古志」を参考し，その助言により和漢の古書を収集し，中国に運んだ。「訪古志」の末に附した森の明治18年（1885）の跋には，「此の書は曩者，守敬楊氏が重価を以って一本を得，甚はだ之を愛す。余曰わく，「此の本は偸抄に係り，其の誤りは少なからず。原本一部は我が手に在り，宜しく校正すべし」と。其の後，未まだ校正に及ばずして手を分かつ」という。

楊守敬はかなり熱心に「医心方」の版木を入手しようとしたが，実現せず，その代り，森立之に依頼して，「医心方」の新刷六部を入手した。その間の事情は，森が楊との筆談交流の記録に名刺・短簡・メモ・招待状などを貼りまぜた資料集「清客筆話」（慶応大学斯道文庫蔵）に痕跡が残っている。その巻六，光緒八年（1882）からまず引こう。

森：「紀事本末」は八百円。

楊：何葉数か。此の書は近日，我が邦に新刻板有り。

楊：余は已に多紀（家）の医書の板（版木）を購う，故に力此れ（紀事本末）に及ばず。十五品（種の医書版木）にて，四百円也。若し「医心方」の板の售る可くんば，則ち之を購わん。

森：速成す可からず，少しく時を俟ちて可也。

楊の「医心方」版木を購入したいという要求にたいして，森は少し待ってくれと応じたものの，結局実現せず，かわりに六部を印刷してやることとなった。「清客筆話」のおなじく巻六に貼ってある楊の森あての短簡を引こう。

森枳園先生閣下　啓者，茲に連四史紙壹篋を付上す。計算するに「医心方」六部を印す可し。（原注：又た前に存ぜし紙二本，一並に工人に付す可くんば，則ち余り有り）伏して祈るらく，速やかに工人に属みて之を印し，十五日を限りて必らず成らしめよ。若し十五日にして成らざれば，則ち印せざる也。此こに懇ろにし，即ち道安を請う。不荘　弟楊守敬頓首　廿六日

また，さきの解題で楊守敬は，「医心方を刻する序」として安政元年の多紀元堅・元昕の序，万延元年（1860）の多紀元琰・元佶の序を引いた後，「文選」に選録される晋の嵇康の「養生論」がじつは編者の昭明太子蕭統によって削除されていることを立証すべく，最後に「医心方」巻二十七から「養生論」を二条引く。まずその一条をあげてみよう。

養生に五難有り。名利去らず，此れ一難也。喜怒除かれず，此れ二難也。声色去らず，此れ三難也。滋味絶えず，此れ四難也。神慮(おも)んばかり精散ず，此れ五難也。五者必ず存すれば，心に老い難きを希(ねが)い，口に至言を誦(とな)え，英華を咀嚼し，大陽を呼吸すと雖も，其の操を曲げざる・其の年を夭せざる能わざる也。五者胸中に無くんば，則ち信順は日に済(な)り，玄徳は日に全く，憙(よろこ)びを祈らずして福有り，寿を求めずして自のずと延ぶ。此れも亦た養生の大経也。

これにたいして，魯迅が校正し民国13年（1924）に序を書いた「嵇康集」の巻四「答難養生論」では，はじめの「去」を「滅」に作って「「医心方」は「去」に作るも，亦た下文の「声色去らず」に因りて譌(あや)まる」と注し，「慮」を「虚」に作って「「医心方」は引きて「神慮精散」に作る」と注し，「大陽」の「大」を「太」に作って「「医心方」は引きて「大」に作る」と注し，「曲」を「回」に作って「各本は「迴」に作る。「医心方」は引きて「曲」に作る」と注し，「憙」を「喜」に作って「「医心方」は引きて「憙」に作る」と注し，「此亦養生之大経也」を「此養生大理之都所也」に作って「「医心方」は引きて「此亦養生之大経也」に作る」と注する。さらに，もう一条もあげてみよう。

嗜欲は人情に出づと雖も，而るも道徳の正しきに非ざるは，猶お木の蝎(きくいむし)有り，木の生ずる所と雖も，而るも木の宜しき所に非ざるがごとし。故に蝎盛んなれば則ち木は朽ち，欲勝たば則ち身は枯る。然らば則ち欲は生と並立せず，名は身と倶に存せざるは，略(ほ)ぼ知る可し。

魯迅の校正になる「嵇康集」では，「人情」を「人」に作って「日本の丹波宿称康頼の「医心方」二十七に引くは，「人」の下に「情」の字有り」と注し，「徳」につき「各本は字奪わる。程本及び「医心方」には有り」と注し，後の「生」につき「原(もと)は「身」に作る。各本及び「医心方」に依りて改む」と注し，「立」を「久」に作って「又た「久」を「立」に作り，「医心方」は同じい」と注する。これらの校注から，魯迅が「医心方」を熟知していたことは，充分に推測できる。

では，「医心方」が「嵇康集」校注にとって重要文献であることに，魯迅はいかにして気づいたのだろうか。それはやはり，楊守敬の「日本訪書志」を読んでのことだったろう。魯迅は1926年2月23日に同郷の後輩たる章廷謙にあてた手紙でこういう，

先日の面談で，「遊仙窟」の細注は，日本人がつけたもので，取るに足りない，と私は言っ

たように思います。昨日，楊守敬の「日本訪書志」を見ると，やはり唐人の作で，その中に引用する書には，唐以後には無いものが有るから，としています。しかし唐代の日本人の作かもしれません。さすればもし骨董の全部を保存したいなら，削除せずともかまわないでしょう。ご参考までに。

たしかに楊の「日本訪書志」巻八，唐・張鷟作のポルノグラフィーたる「遊仙窟」一巻の解題には「其の注は誰の作なるかを知らず。其の地理諸注に於いては，皆な唐の十道を以って之を証すれば，則ち亦た唐人也。注中に陸法言の説を引くは，是れ猶お「切韻」の原本を見るに及ぶがごとし。又た范泰の「鸞鳥賦序」，孫康の「鏡賦」，揚子雲の「秦王賦」を引くは，皆な向(さき)には未まだ聞かざる所の者。又た何遜の「擬班婕妤詩」を引くも，亦た馮氏の「詩紀」に載せざる所なり」とある。

それから三年後の1929年２月，川島，つまり章廷謙が北新書局から出版した校本「遊仙窟」に書いてやった民国16年７月7日の序言で，魯迅はこういう，

「遊仙窟」は伝奇であり，諧謔も多いので，史志はすべて記載しない。清の楊守敬が「日本訪書志」を作り，はじめて著録したが，これを貶すことは「唐書」（張薦伝）の言と同様である。日本ははじめはかなり珍重し，異書とみなした。注がついていたが，また唐代の人の作らしい。市川世寧はかつてその中の詩十首余りを「全唐詩逸」に入れ，鮑氏（廷博）は「知不足斎叢書」中に収め刊行した。今，矛塵（章廷謙）がつぶさに印行することで，全文がはじめて中国に復帰するのである。

以上の「日本訪書志」の日本刊本「遊仙窟」への言及から，魯迅が「医心方」に気づいたのも，おそらく楊の「訪書志」の解題を通してのことだった可能性が高い。

また，ここで「医心方」以外の日本の医学書購入にたいする楊守敬の関心にも，多少ふれておく。さきにも引いた楊と森立之による「清客筆話」巻二，光緒七年（1881）五月十七日の筆談によると，多紀桂山（元簡）とその子茝庭（元堅）の医学が話題となり，楊が「此の人の父子兄弟は皆な術に精(くわ)しく，且つ博洽多聞にして，貴邦の文人は之に及ばざるに似たるは，何んぞ耶(や)」と問うと，森は「元堅は茝庭と号し，桂山の次子也。兄（元胤）は柳汧と号し，早く死す」と応じ，そして元胤の名著「医籍考」が取り上げられる。

楊：丹波父子の書を刻するは少なからず。

森：其の著書は已に刻に入る者数十部，其の他「医籍考」八十巻の如きは未刊なり。

楊：此の書は我が国の朱竹垞（彝尊）の「経義考」の例に仿(なら)える乎(か)。其の稿は今何処(いずこ)に存するや。

森：吾が知る所の両三家も亦た之を蔵する者有り。

楊：此の書は刻す可き也。丹波は一身にして古人の為に書を刻すること少なからず。此の書は何を以って之を刻さざる。

森：柳沂は拙筆にして，草稿は甚はだ拙劣なり。故に近年に在りて脱稿するも，未まだ刻に入るに暇あらざる也。

楊：今其の家は能(よ)く力有りて之を刻する乎(か)。

森：今家には一書冊も無し。悉とく皆な沽却(うりはら)い，只だ衣食を給する耳。

楊守敬は上述したように多紀家の医書の版木十五種を四百円で購入すると，帰国後まもなくそのうち十一種の版木に二種の医書を加えて「聿修堂医学叢書」を刊行した。そこにはもちろん「医籍考」も収められている。

この「叢書」はどうやら北京で流通していたらしい。当時北京にいた読書家で李戸部ともよばれていた浙江人の李慈銘（1829－1894）の「越縵堂日記」光緒十五年（1889）四月十三日にはいう，

「難経疏証」日本人丹波元胤著，凡て上下二巻を閲す。前に「難経解題」一巻有り，「其の父の撰する所に本づきて之を増補す」と云う。其の末に年を題して文政己卯と曰い，自称して東都丹波元胤紹翁学と曰う。東都は即ち日本の東京，紹翁は則ち其の字也。其の籤に題して多紀柳沂先生著と曰う。後に医学館御蔵板目録五葉を附し，中に多紀柳沂先生の著する所を列し，此の書及び「医籍考」百巻，又た「疾雅」三十巻，「名医公案」五十巻有り。多紀は蓋し居る所の地名，柳沂は則ち其の別号也。其の人は蓋し彼の国の博洽の士にして，尤も心を医学に究めし者，其の采取する所は甚はだ博く，滑氏の「本義」に於いて間ま駁正有り。其の字義を訓釈するは多く「説文」「字林」「爾雅」「広韻」の諸書に本づく。

「難経疏証」は多紀元胤が文政五年（1822）に完成した「黄帝八十一難経疏証」二巻に森立之・約之(のりゆき)（1837－1871）親子が嘉永五年（1852）・文久三年（1863）に校訂を加えたもので，「聿修堂医学叢書」に収められている。李はこの書について，「其の人」元胤が「彼の国の博洽の士」で，「采取する所は甚はだ博く」，元の滑寿の名著「難経本義」についても間ま反駁訂正する記述がある，などと褒めており，読後の感想として「彼の国の医学の盛んなるは，中朝の及ばざる所の者有るを想見す」とまで評価する。

さて，このような状況のなかで，内陸の湖南にいた葉徳輝も日本の医学書と無関係ではなかった。そのことは，かれの死後，民国17年（1928）に刊行された「郋園読書志」巻六，「神農本草経」三巻「日本嘉永七年（1854）刻本」（「観古堂蔵書目」巻三，子部方技類本草之属にも日本森立夫輯として収める）の解説に明らかである。これは森立之が中国の本草書のみなら

ず,「医心方」「本草和名」など日本にのみ伝わる文献も参考にした輯本で,葉の解説にはいう,

> 此れは日本の森立之の輯むる所にして，前に嘉永七年甲寅の自序（重輯神農本草経序）有り，是れ中国に在りては咸豊四年。其の例は序録を以って首に冠し，上中下三品を分かちて三巻と為し，合わせて四巻。前の自序は本書の巻数・分合の次第を考証し，引証は博くして且つ精し。後に攷異を附し，群書を取り校するに，吾が国に未まだ有らざるの佚書古本多し。独り孫輯に此の謹厳無きのみに非ず，即(たと)い顧輯にても亦た此の精確無し。顧序に「天の未まだ斯文を喪ぼさず」と謂うも，惟だ此れのみ以って之に当たるに足る。書は繭紙と為し，初印。毎半葉十行・行二十一字。槧刻は精良にして，同文の盛んなるを想見す。読者は高麗本等を以って之を夷(いや)しむ勿(な)かれ。

森の引証の広博・精密，中国では消えた古逸書の使用などを葉は評価したうえで，この「神農本草経」輯本は「孫輯」孫星衍が嘉慶四年刊「問経堂叢書」に収めた輯本も,「顧輯」顧観光が道光二十四年に刊行した輯本もしのぐ，と絶賛する。さらに顧観光がおのれの輯本の序で「本経三百六十五種の文は，章章考うる可く，闕佚無く，羨衍無し。豈に天の未まだ斯文を喪ぼさずして，留め以って待つ有りしに非ず乎(や)」と自賛するのにたいして，この森の輯本こそが「天の未まだ斯文を喪ぼさず」という言葉にふさわしいのだ，と一蹴する。

4

さて,「医心方」の内容が中国国内によく知られるのは,魯迅のごとく,光緒二十三年（1897）の「日本訪書志」刊行の後だろうが，しかし楊守敬は光緒十年（1884）日本から帰国したおりに，新刷の「医心方」六部を携えていた。この六部は，楊が帰国後に日本購入の宋元版古籍などの販売活動を展開したことと連動して，各地の蔵書家に広まったようである。そのような一人に，北京の葉昌熾がいた。

葉昌熾(しょうし)（1849－1917）は，清末の正統派経学者で，清朝の遺臣。長洲（江蘇・呉県）の人。字は鞠裳,号は緣督廬主人。光緒二年(1876),郷試に合格,光緒十五年(1989)には進士となり,翰林院庶吉士，散館編修を授けられ国史の纂修にあたった。その後，会典館帮総纂，国史館提調，国子監司業，翰林院選文などを歴任して侍講に昇進した。しかし光緒三十一年（1905），科挙制度の廃止令がくだると，退官して故郷に帰った。校勘学・金石学にすぐれ，歴代蔵書家を述べた「蔵書紀事詩」七巻，古今石刻を研究した「語石」十巻などの著作がある。

そして，民国22年（1933）に王季烈の編集により上海の蟫隠廬から印行された「緣督廬日記鈔」十六巻は，葉昌熾の同治九年から民国６年までの四十八年間にわたる日記だが，そこには昌熾が「医心方」の存在を知り入手する過程が記述されている。まずは，楊守敬が日本から帰

国したばかりの年，巻三，光緒十年八月十九日の日記をあげよう。

翼甫の書を得て，知るらく，楊惺吾（守敬）は東瀛自(よ)り宋元槧を携え帰ること少なからず。「広韻」は金刻宋刻有り，「礼記」「周礼」は皆な宋刻有り，小字本「文選」は数本有り，又た元刻「韻会挙要」，宋板「釈蔵」有り。全部で三千余金を售(う)らんと欲す。

「翼甫」は，査燕緒（1843－1917），字は翼甫，号は継亭のこと。浙江・海寧の人。蔵書家で，室名は木漸斎。光緒八年には湖北志局で「湖北通志」の纂集に加わり，十一年（乙酉）には，昌熾の九月十七日の日記に「翼甫を訪ね，其の浙闈にて七十五名に中式せしを知る」とあるごとく，挙人（孝廉）に合格した。「群書異詁」八巻，「継亭詩文集」などの著作がある。かれの手紙によれば，楊守敬はブローカーの本領を存分に発揮して，日本で手に入れた古籍を「三千余金」もの高値で販売しようとしていたのである。

さらに九月初三日の日記にはいう，

翼甫の書を得たり，楊星吾の「出售書目」二紙を寄せ来たるに，古鈔「易書単疏」・宋刻「尚書注疏」「春秋集伝」「玉篇」「広韻」有り。「玉篇」は又た元刻三本有り，「広韻」は四本，各おの板を同じうせず。「文選李善注」も亦た宋元各おの一本有り。又た宋刊「唐文粋」「宋文鑑」「礼部韻略」，金刊「五音集韻」，影宋本「尚書正義」「爾雅」，及び旧槧旧抄の医書の甚はだ夥(おび)ただしき有り。皆な是れ日本より携え帰りし者にして，洵(まこ)とに大観也。

査燕緒が手紙に同封した楊の「出售書目」販売書リストのなかには，おびただしい「旧槧」や「旧抄」の「医書」があった。ここにはきっとあの六部の「医心方」も含まれていただろう。

この後，昌熾は査氏を通して楊といろいろ交渉したようだが，結局は徒労におわったようである。たとえば，十月初七日には「翼甫の書を得て，星吾は書を送り来たるを允(ゆる)さずして，僕に前に往かしめんと欲するを知る」とあり，十月初九日には「又た翼甫の書を得て，前函は星吾が督して写(か)かせしもの為るを知る。其の人の離奇閃爍たる，与(とも)に比倫する無し。此の事は唇舌を費やすこと数月，終に画餅と為る耳」とある。

しかし意外にも，楊の書は査燕緒が購入するという展開になったようだ。十一月廿四日には「翼甫来たりて談り，為に星吾の詭譎は絶頂，目録の学は絶頂なるを言う」とあり，その翌日十一月廿五日の日記にはいう，

翼甫を訪ね，其の得る所の元の建安鄭氏刻「玉篇」・余氏双桂書堂刻「広韻」，又た明刻「篇」「韻」各一部を見て，即ち携え帰る。又た日本内府刻「医心方」有り，僅かに一冊を見るのみ。皆な容成の術にして，多く黄帝の言を述ぶ。訓と為す可からずと雖も，亦た未見の奇書也。

査氏が購入した「医心方」は昌熾に強い印象を与えたようで，「玉篇」「広韻」ともども「携え帰」ったようだ。そして「日記鈔」巻三，翌光緒十一年（1885）三月十五日の日記には「医心方」を査氏に送り返したことを述べていう，

> 又た翼甫に柬して「医心方」を帰す。「医心方」は「従五位下行鍼博士兼丹波介丹波宿祢康頼撰，安政元年，侍医多紀元堅・多紀元昕校刻」と題す。前には二人の「序」有り，康頼は即ち二人の遠祖也。中国の唐初に在りて，采る所の逸書墜典は甚はだ多く，洵（まこ）とに医林の宝笈也。

そして以下には「医心方」が引用する古籍名を「太素経」から始めて列挙し，おわりには「玉房秘訣」「洞玄子」「元女経」がならぶ。そしてこの返却の後，「医心方」に関する記述は「日記鈔」に見出せない。しかし後の記述からみると，どうやら昌熾は査氏から一部を譲り受けたようだ。

のちの巻六，光緒十六年（1890）正月廿三日に「翼甫の子（査文清か。小説家金庸の祖父）来たり業を受け，「説文段注」及び「樊敏碑」を以って摯と為す」とあり，昌熾に息子の教育を委ねてもいるので，査氏はこの「医心方」をあるとき贈呈したのかもしれない。

また同年十月廿九日に「翼甫の書を得たり，将に日本に赴かんとし，「滬に在りて玉海の元刻元印本を見る」と云う」とあるごとく，この年，査燕緒は駐日公使李経方の領事官として東京の公使館に赴任し，その翌年に赴任した詩人鄭孝胥も「鄭孝胥日記」光緒十七年四月卅日に，公使館で「復た其の同事たる査翼甫（原注：燕緒，浙江人，乙酉の孝廉）に晤う」と記している。そして査氏は日本滞在中，楊と同じく古籍収集にはげんだようで，帰国後の二十年，候選知県でもって同知に保挙され，巻七，光緒二十一年（1895）十一月初五日には「翼甫来たり，宋刻「玉篇」・元刻「広韻」を持ち示すに，皆な海東より携え帰りし者。細かに審（しら）べるに，実は明初の刻」とある。査氏はあるいは「医心方」をもう一部手に入れたかもしれず，それを贈呈したのかもしれない。

5

さて，その翌年光緒二十二年（1896），三十三歳の葉徳輝は，三月初めに長沙から上海に往き，四日は南京に着き，鍾山書院の繆荃孫に拝謁した。八月には北京に赴き，宣武門外の褲腿胡同四号の瀏陽会館に逗留した。この北京滞在で，葉は当地の学者たちと親交をもったが，その中にこの「医心方」の所有者たる葉昌熾がいたのである。

まずは「緣督廬日記鈔」から，徳輝がはじめて昌熾を訪れた記述をあげよう。巻七，光緒二十二年八月初七日の日記である。

葉煥彬史部徳輝が来談し，刻する所の「沈下賢集」「阮氏三家詩補遺」及び輯むる所の許氏「淮南（鴻烈）閒詁」「淮南万畢術」各種を贈らる。煥彬は本もと吾が郡の洞庭西山の人，其の祖は楚南に遊幕し，遂に湘潭の籍に入る。家譜を詢えば甚はだ殷んなり。僕は告ぐに「公は楚籍なるに，真とは呉人。余は呉籍なるに，真とは越人也」を以ってす。

そしてその二日後，徳輝がこの葉昌熾にあてた手紙に「医心方」が登場するのである。光緒二十二年八月初九日の手紙（「葉徳輝集」第四冊「新輯郋園信札詩文・信札」，学苑出版社，2007年７月）をあげよう。

鞠裳宗丈先生閣下。昨日は厚擾し，謝謝す。拙著「淮南」二種は，飣餖すること十年，而る後業を卒え，引用の書も亦た頗る周備，且つ善本多く，問経（「許慎淮南子注」を自輯の「問経堂叢書」に収めた清の孫馮翼）の未まだ見ざる所と為す。惟だ刻せし時，輝は客遊に在り，一切は親校に出でしに非ず，引用せる巻第は未まだ覆査するに及ばず，其の中の訛乖は当に復た少なからざるべし。行笥には僅かに四五冊有るのみ（原注：此の間は惟だ王・孫祭酒（王先謙・孫詒譲），及び研甫師（徐仁鋳）に贈りしのみ），従より未まだ出だし以って人に贈らず，吾が丈の愛せ見るを以って，特に教えに呈せし耳。当に重刻し贖い帰るを遅ち，以って談柄を釈かん。

「医心方」は価を擲げ来らんことを乞う。此れは同郷の李戸部に転借するに系る。其の人は形躯は漚漊として学問は深長，言語は粗疏として攷拠は精密，他日亦た此の人物を見ざる可からざる也。手ずから柬し，敬しんで纂安を叩く。徳輝謹みて啓す。丙申八月初九日。

手紙の後半からみて，昌熾はこのとき「医心方」をすでに自己のものとして所有しており，徳輝はそれを知っていて，拝借したいので「価」値段を「擲来」示してくださいと「乞」たのんだのだろう。それも同郷の李戸部に貸してやるためという。「同郷」湖南人で北京の「戸部」官職につく「李」某は，未詳。

この徳輝の手紙を受け取って，昌熾はいかなる反応を示したか。それは「日記鈔」の八月初十日の日記に明らかである。

煥彬の書を得たり。其の友李戸部の為に「医心方」を借らんと欲す。夫れ従より未まだ面を覿ざるの人を以って，遽かに相い通仮するは，則ち杜暹を待たずして其の不可なるを知れり。新刻せる「世説新語」を以って貽ら見，前には「佚文」「刊訛」「引書目」有り，皆な其の著する所也。

費用を払いますから「医心方」を李某のために貸してくださいという徳輝の頼みにたいして，

会ったこともない者に，あわてて貴重書を貸すなどとは，杜暹を持ち出すまでもなく駄目にきまっている，と昌熾は応じる。「杜暹」は，唐代の廉潔で名高い官吏で，金品の受け取りはすべて拒否した。監察御史となり，安西の突騎施のテントに行ったとき，金を贈られて固辞できず，テントの下に埋め，国境を出てから，文書をおくり掘り返させたという。

このように冷酷な昌熾の心中を全く察せず，徳輝は翌日手紙を出した。八月十一日，昌熾にあてた手紙をあげよう。

鞠裳宗丈先生閣下。昨は尊紀（あなた様の従僕）に縁(よ)り「世説新語」一冊を奉上せしが，諒(おも)いやるに已に詧収されしならん。「医心方」は是れ会文堂に持ち去ら為(れ)しや否や。伊(かれ)は李戸部の処に在りて値い廿金を索む。戸部の光景は吾が丈と相い似たり。前の価は果たして尊裁自り出でしや否や，抑(そ)れとも会文の浮報に系るや，統(す)べて示知を乞う。其の手を他人に仮る与(よ)り，賤子(それがし)の之が介紹を為すに如かざる也。此こに纂安を叩く。徳輝謹みて啓す。八月十一日。（原注：戸部は人は極めて誠篤なり。先に仮りて一閲せしむを乞う可きや否や。窮する京官の書を売り書を買うは，二つの尋常事也）。

この手紙で徳輝が報告するのは，新たな事態である。つまり会文堂書店の者が李戸部の居宅に赴いて，「医心方」の売値として「二十金」という手の出ない高値を提示した。そこで徳輝は，昌熾が会文堂に，所有する「医心方」を渡し値段も決めて，李戸部のところへ売りにいかせたのでは，と疑ったわけである。「会文堂」「会文」は，当時は瑠璃廠(リウリーチャン)の小沙土園の路西の北直文昌会館内にあった書店で，のち他所に移転した。繆荃孫の「琉璃廠書肆後記」には「（廠）橋を越えて西し，・・・再に西し，・・・路南には会文堂の劉氏有り」とあり，孫殿起の「琉璃廠書肆三記」には「会文堂　劉会堂，字は鶴峰，光緒二十□年に開設し，文昌館内に在り。経営すること十余年，後に琉璃廠の宝森堂の東偏に遷る。民国十□年，鶴峰の子が其の業を継ぐも，経営数年にして歇(や)む。近ごろ銘泉閣南紙鋪に易わる」，「文昌会館は，小沙土園の路西に在り」，同じく孫の「販書伝薪記」には「会文堂　劉会堂，字は鶴峰，冀県の人。弟子　馬□□，韓金堂，姚殿恒，栗長林，閻玉簡」とある。

この手紙から二日後，徳輝は昌熾の宅を訪れた。「日記鈔」八月十三日の日記には，「煥彬来談し，「著する所に「宋元板本攷」「論泉絶句」有り，自のずと是れ吾が宗の巨擘なり」と述ぶ。僕は告ぐるに「公は「世説」を読むこと太(はな)はだ熟せり。挙止謦咳，皆な臨川（南朝宋の臨川王で，後漢・魏・晋の士大夫の言行録「世説新語」の撰者たる劉義慶）の筆に入る可し」を以ってし，覚えず大笑す」とあり，「医心方」の話題は出なかったようである。

しかし，それから一月後，また事態は急転する。「日記鈔」九月初七日には「何估来たる。共に唐碑三種，宋元碑六種，経幢十種，価六金に諧(かな)う」とあり，その六日後の九月十三日の日記にはいう，

何估来たり，「医心方」一部を以って劉燕庭の「金石苑」に易え得たり。

どうやら昌熾は書店の何某に宅まで来させて，所有する「医心方」と引き替えに，清の金石学者劉喜海，字は燕庭，が朝鮮の金石拓本を集めた「海東金石苑」八巻を手に入れたようなのである。これで昌熾から「医心方」を借りようとの徳輝の目論みはあえなく潰えた。なお「何估」は,「日記鈔」巻七，光緒二十一年十月廿五日にも「何估来たり,「攀古廔金石」一部を以って，与に「指月録」一部,「会稽掇英総集」一部,「徐緝園煙墨著録」一部に易う」とあり，あるいは会文堂と同じ場所で営業していた会文斎の主人の何培元か。「琉璃廠書肆三記」には「会文斎　何培元，字は厚甫，衡水県の人，光緒二十二年に開設し，文昌館内に在り。板本を識る」とあり,「販書伝薪記」には「会文斎　何培元，字は厚甫，衡水県の人。弟子　韓逢源，何長洲，楊紹成，陳同和」とあり，徳輝の聞いた会文「堂」は「斎」と混同したのかもしれない。

そしてこの二か月あまり後，徳輝がまた昌熾の宅を訪れたとき，話題は「古泉」古銭にかわっていた。「日記鈔」の十一月廿五日の日記には,「煥彬来たり，古泉を談じて,「収むる所は甚はだ博く，鮑子年・李竹朋の未まだ見ざる者有り」と云う」とある。鮑子年は鮑康，李竹朋は李佐賢，いずれも清の古銭幣の収蔵研究家である。

ともかくも，徳輝は，友人の李戸部の代理であったにせよ,「医心方」について初歩的知識はもっていたろうが，昌熾との交渉のなかで「医心方」の内容や，それが持つ重要性をより認識したにちがいない。それゆえ，この交渉が不調におわると，今度はかれ自身のために「医心方」を探し求めることにしたのだろう。

6

さて,「医心方」の研究書として最新の杉立義一氏の「医心方の伝来」（思文閣，1991年３月）の，第６章「半井家本の影写と刊行」第７節「中国への紹介」（２）双梅景闇叢書には，このような一段がある。

明治三十五年（光緒二十八年，1902），清国長沙の考証学者葉徳輝の門人が来日して，上野の帝国図書館で「医心方」を見て，巻二十八房内篇に，中国ではすでに散佚した隋・唐の房中書が引用してあるのを見出した。そこで巻二十八を筆写して葉のもとに送った。葉徳輝はさらにこれから抄出して,「素女経」「素女方」「玉房秘訣」「洞玄子」各一巻を復原し，これに「天地陰陽交歓大楽賦」他八部をそえて，光緒二十九年（明治三十六年，1903）「双梅景闇叢書」として刊行した。

杉立氏の記述が何にもとづくのか不明だが，これによれば「医心方」は来日した門人によって葉にもたらされたという。門人が誰かは特定できないとはいえ，その可能性はたしかに無いとはいえない。しかし別様の記述もある。

漢学者の松崎鶴雄は宣統二年（1910），文字学を学ぶために長沙の葉徳輝のもとを訪れ，弟子として前後九年間，かれに師事した。その松崎のエッセー「葉徳輝をめぐる文事」（「呉月楚風――中国の回想」出版科学総合研究所，1980年３月）には，葉をはじめて訪れたころの状況を以下のごとく回想する。

城門の扉ひとへで城内は平日にことならず，往来頻繁であった。蘇家巷と云ふ袋小路に，怡園と称する広壮な邸がある。これが学界に誰しらぬものゝない葉徳輝師の住居であった。くちなしの花がやはらかに匂ふ，閑静なところに近眼鏡を拭いて書見し，片手に筆をもち，なにか校訂をしてゐる。ちかよってみると，ふるい写本である。日本の丹波康頼が編輯した医心方と云ふ書物である。葉氏は微笑して示したのが，素女経一冊だ。

うつし手が無学であったと見えて，誤写だらけで，たうてい読みくだされない。それを根気よく訂補して，意味が通じてきたが，まだ充分わからぬところが二,三箇所ある，といふ。先生はこんなものを講ずるのか，とからかふと葉師はむきになって怒鳴りかへす。孫星衍も平津館叢書のうちに，これと類似のものを編入してゐる。黄帝いらい，入道の大本，陰陽の消長をきはめたもの，門弟には自由に研究することをゆるす。貴国にもこんなのがあるから馬鹿にならんよ。これは水野梅暁和尚からもらった，とつけくはへた。

水野和尚は故近衛篤麿公の後援で同文書院に聴講したのちに長沙へのりこみ，仏教界の開展に快腕をふるひ，赤手空拳で長江流域に浄財をつのり，寺をたてたり，学校をひらいたりした。当時しらぬものはなかった。

葉師は三十五万巻の古版旧書をあつめ，ひろい二棟の二階に，宋元明版と古写本を整置して観古堂とよび，書籍は架上におき，書架の足に硫黄末を盛って虫の侵入をふせぎ，一週二回，硫黄末をとりかへてゐた。蔵書には，ひとつも虫がついてゐなかった。自身は書架のあひだに簡易なベッドをおいて寝た。

葉師は，はやく夫人をうしなひ索居してゐたので，ふしぎにおもったが，数年まじはってゐると正体がわかった。ときをり駕を命じて華胥へあそぶと云ふ。いっそう，師の博聞強記が信ぜられ，道学的な臭気がなく興味があった。

筆者は葉家には，たまにとまったが，はなしが終って，寝につくと，ギーッと門があくと同時に，かごのゆれる音がする。たまには，先生，素女経をおもちですか，ときくと，哄笑して，バカ，とっくに暗記してゐる，とやりかへされた。

ちなみに，素女経は閨房衛生をといたもの，葉氏編の双梅景闇叢書に入ってをる。ほかにも海陵王荒淫などを刊行し，この種のものを多く秘蔵してゐた。

この回想によれば，「医心方」は日本の僧侶の水野梅暁（1878－1949）がもたらしたごとくである。ところで，「東亜同文書院大学史」（滬友会，昭和57年５月）の第３章「各界における同窓の活動」の「学僧・日中友好の先駆者　水野梅暁」によれば，水野は旧福山藩士金谷俊三の四男として生まれ，幼少のころ法雲寺住職水野桂厳の養子となり，十三歳で出家した。小学校卒業の後，京都の大徳寺高桐院に入ったが，明治27年上京し，小石川の某寺で小僧となり，哲学館の夜学に通った。ついで東亜同文書院の根津一院長の知遇をえて，明治34年上海へ随伴し，同文書院一期生に編入されたが，その在学は実習生のようで，高昌廟の学校の門衛係や図書の整理係をしていたという。そして明治37年（1904）に卒業すると，浙江天童山の如浄禅師の墓塔を拝し，住職敬安との交友を深め，かれの勧めにより翌明治38年（1905），曹洞宗開教師として湖南長沙にやってきて，当時最高の禅寺とされた開福寺の境内に僧学堂を開設し，布教のかたわら学僧たちを集め，日本語や教典の講義をした。ここで葉徳輝はもとより，王闓運・王先謙らの知遇を受け，岳麓の道尚和尚，廬山の大虚和尚らと親交を結んだ。そのころ，水野を訪ねて長沙までやってくる日本人も多く，西本願寺法主大谷光瑞もその一人だったらしい。

以上の水野の経歴から明らかなごとく，かれが長沙にやってきたのは光緒三十一年（1905）のことで，「双梅景闇叢書」の刊行から二年後になる。つまり，松崎が目にした「医心方」は，葉が「叢書」のために房中書を抽出するもととなったものではなかろう。

松崎と同じく，宣統二年（1910），詞曲学を学ぶために長沙の葉のもとにやって来て，民国元年（1912）に帰国した東大教授の塩谷温は，「師友の追想」（「天馬行空」日本加除出版，1956年７月）の「葉徳輝先生」の条でわずかに「叢書」にふれている。

> 又先生は蔵書家として名高く，その撰著は四部に亘って，無慮六十八部五百余巻に及ぶを見れば，学殖の如何を知るべく，更に進んでその内容に就ては，観古堂叢書，観古堂書目，麗楼叢書，双梅景闇叢書，葉氏家集を繙けば，その該博にして且つ精緻なることを知ることが出来る。

ところで，はじめに引いた諸橋轍次の「遊支雑筆」では，かれが大正９年（1920）５月12日に葉と会見した際に「筆談す」と述べているが，その筆談は「諸橋轍次との筆談」（「葉徳輝集」第四冊「新輯郋園信札詩文・雑文」）として残されている。そこから，葉が松崎・塩谷の二弟子について語っている部分を，参考にあげよう。

> 塩谷温・松崎鶴雄は鄙人（わたくし）が二王先生（王闓運・王先謙）と異なるを知る。塩谷は鄙人従り曲学を受け，松崎は鄙人従り小学（原注：「説文」の学）を受く。此の二学は貴国の向（さき）には未まだ講求せざりし者。鄙人は之を貴国に伝え，以って中国将に絶えんとするの学を存せんと欲するも，惜しい乎（かな）一年二年の能く業を卒（お）うる所に非ざる也。鄙人は尚お陰陽五行の学有り。

此れ皆な曾文正（国藩）・二王先生の知らざる所の者。

さて最後のまとめとして，葉の「双梅景闇叢書」はひろく中国学の視点からみで，いかなる意味をもっているのか。これに答えるものとして，オランダ人で十数か国語に堪能，「ディー判事」シリーズの推理小説を書き，日中のオランダ大使館に勤務し，中国性文化の研究者として著名なファン・フーリック（1910－1967, 漢名は高羅佩）が, 1951年に東京で「秘戯図考」（原題はErotic Colour Prints of the Ming Period）を刊行した後，より充実させ，1961年にライデンで刊行した「古代中国の性生活――先史から明代まで」（松平いを子訳, せりか書房, 1988年４月，原題はSexual Life In Ancient China,a preliminary survey of Chinese sex and society from ca.1500BC. till 1644AD.，漢題は中国古代房内考）の第六章「隋王朝」から関係する箇所を引こう。

『医心方』の先駆的研究は中国近代の学者葉徳輝（1864－1927）により，一八五四年の版を用いてなされた。丹波がその二十八巻に引用している五種の中国古代性典の量からみて，原典のほとんどはこれら断章を基にして再現できると彼は考えた。そして一九一四年に，葉は『隋書』であげている次の四種を公刊した。

『素女経』,『玄女経』とあわせて，１項。

『素女方』，２項。

『玉房秘訣』，５項と６項。

『玉房指要』，恐らく７項に同定できよう。

加えて葉徳輝は『洞玄子』（洞玄先生のアルス・アマトリア）という本を再現した。この重要な書物は『唐書』の「芸文志」で初めて言及されている。H・マスペロは「洞玄」とは七世紀中葉，首都の医科学校の監督だった李洞玄博士であるとしている（H・マスペロの論文より。Journal Asiatique p.383）もしこの同定があたっているとしても，李はただ校訂編集しただけであろう。なぜなら，その様式，内容ともに六朝を指しているからだ。

これら五種の性の手引書は葉徳輝の『双梅景闇叢書』（編集開始一九〇三年，木版完成刊行一九一四年）で出版された。このことが同時代の旧式学者たちの感情をいたく害したため，彼の学者としての評価はたちどころに破滅し，悲劇的な死――彼は匪賊に殺された――さえも多くの同情を呼びさますにいたらなかった。中国の学者は書籍に博く通じていることを称賛するのが例であるだけに，ここで示した頑迷さはよけいに目立つ。かれらは人の学識をその量ではかり，道徳的な欠点や政治上の失敗を問題にしなかった。しかし，セックスばかりは別である。この特別な問題に手を染めたが最後，その学者はただちに葬り去られる。この事実は，清朝の文人たちが己れの性的抑制においてひどい混乱に陥っていたことを雄弁にもの語るものである。

葉徳輝が，彼に“品性下劣なり”の汚名を負わせた人々と同類の旧式学者だったという皮

肉な事実は注目に値する。彼は復元された手引書の序文のなかで，この版本の刊行により，何世紀もまえの中国人が近代西洋のなしたことをすべて知っていたことを示そうとしたのだと説明している。

西欧科学への蔑視感はさておいて，葉徳輝の出版物は彼が広い読者をもつ良心的な学者であったことを証明している。彼がこの五種の版本を論じたやり方にもそれは明らかである。

このファン・フーリック氏の高い評価に呼応するかのように，現在の研究者からも葉を再評価する発言が現れはじめた。たとえば北京大学歴史学系教授たる羅志田氏の論文「思想観念と社会役割の錯位：戊戌前後湖南新旧の争い再思」（「権勢転移：近代中国の思想・社会・学術」，湖北人民出版社，1999年）の「旧中に新有り：王先謙と葉徳輝の国情に対する認知」では葉が，西欧列強と交流している現在，外国を夷狄とみなすべきでなく，清史を修するにあたって「外夷」伝は「外国」にかえるべきだと主張したり，天理人心は中国も西欧も同様で，キリスト教はわが名教に合致するとのべたり，「古今に百年不変の学は無し」という見解にもとづき，西学に反対しないのみならず，西学の役に立つものは取り入れるべきだと主張したりすることを，主に葉の書簡により提示したのち，葉の学問は古くないばかりか，「一般の儒生の見解をはるかに超えるほど新しい」とする。今後の葉徳輝にたいする評価はいかなる方向に向かうのか，注視しつづけるべきだろう。